二〇二二年七月二九日

巡視船瞬き交はす夏の星　ひのと
ねんごろに魚網つくろふ島晩夏　ひのと
一畝はラインダンスの花オクラ　あひる
遠雷にそそくさと終ふ立ち話　もとこ
法被着て別人となる盆踊り　満天
花火師の男気闇に打ち上がる　たか子
庭風の通ふ昼寝の座敷かな　宏虎
奇声上げ子ら噴水へ駈けだしぬ　宏虎

二〇二二年七月二八日

燃え尽きてなほ手花火を離さぬ子　ひのと
夕焼けに染まる一番風呂の窓　宏虎
発車ベル待たず栓抜く缶ビール　千鶴
チェーンソーの唸るに似たる蝉時雨　満天
花火師の中洲に躍る影法師　智恵子
バス停は杭一本や青田道　ひのと

二〇二二年七月二七日

浜おもと海を見下ろす無人駅　澄子
梅干をひとつ含みて暑に耐ふる　こすもす
襟足をくすぐる坂の風涼し　あひる
青蔦に絡みつくされ廃工場　素秀
到来の北の大地のメロン切る　みきえ
雨雲の虹を残して去りにけり　なつき
下町の老舗銭湯吊り忍　澄子
虫捕りの子ら集りて品評会　かえる
水やりの最中もぎりてトマト食む　千鶴
古畳へこみによろけ土用灸　なつき

二〇二二年七月二六日

片肘で宿題おさへ扇風機　ひのと
風入れの紅型に母なつかしき　もとこ
炎天下まっさらな家組まれゆく　澄子
夏の蝶ふらりと汽車へ乗り込みぬ　ひのと

二〇二二年七月二五日

耳遠き父は寡黙や初盆会　あひる
泣き虫を泣かせたまゝに紫蘇刻む　ひのと
収穫の西瓜赤子のやうに抱く　豊実
猛暑中街駆け抜ける救急車　満天

二〇二二年七月二四日

吹き渡る風を糧とし青田伸ぶ　千鶴
うなぎ焼く今日土用なる鐵工所　素秀

二〇二二年七月二三日

保津川の飛沫に奇声船遊び　智恵子
蝉時雨閉ざせし校舎ゆするごと　満天
迷ひなく田の水切るや土用干　千鶴
入道に大暑の空を明け渡し　たか子
海と空大きく在りて夏館　もとこ
絵手紙の紙をはみだす大花火　満天
漣のごとくにそよぐ蓮の池　明日香